

▼オピニオン

先進地域の今・そして未来（後編）

NPO法人 州都広島を実現する会 事務局長
シビルNPO 連携プラットフォーム 理事

野村 吉春



■ この国の未来は辺境から起きる

今年のNHKドラマの「鎌倉殿の13人」では、「源頼朝」は京の都ではなく、「関東の地」から平家を西国まで追い詰め、1192年に初の本格的な武家政権「鎌倉幕府」がスタートします。

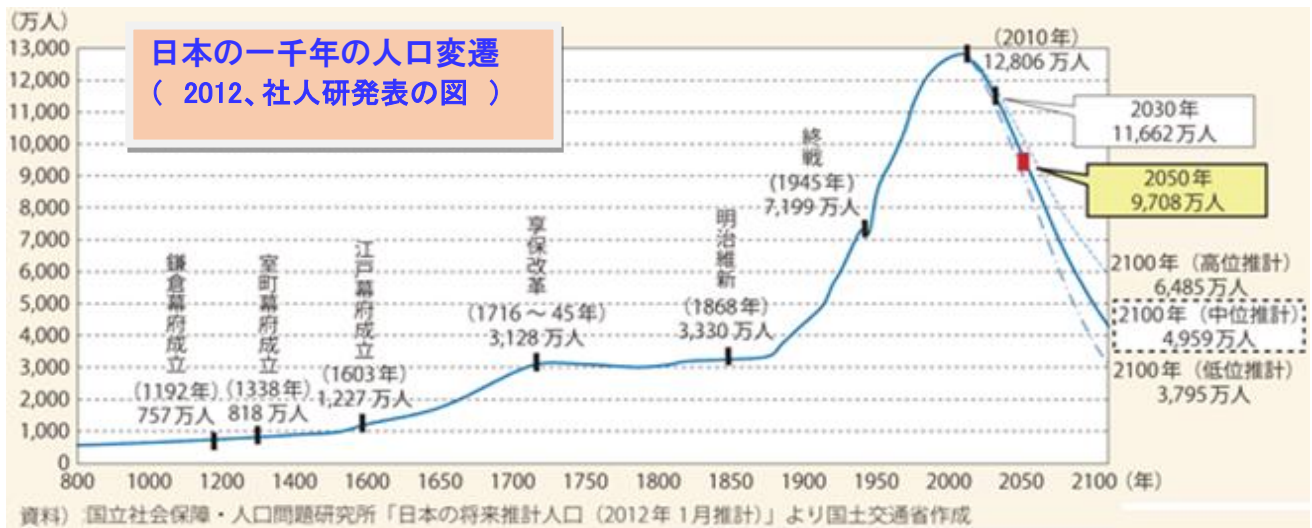
また戦国時代には、「徳川家康」もまた京の都から離れた、「三河や駿河」から勢力を拡大し1600年に天下分け目の「関ヶ原の戦い」に勝利し、その3年後に「徳川幕府」を開いています。

その後265年間に及ぶ徳川幕府は、「西国末端の薩摩と長州」によって、江戸城の無血開城（政権返上）を果たし、1868年に武家政権に代わって「明治政府」が誕生しています。

過去一千年の歴史の転換は、いつも中央ではなく、地方の末端から変革が起きています。

■ この国の人口の変遷

他方で、日本の人口は江戸時代に約3000万人で安定し、明治以降100年間で4倍に急増し、皆さんのお孫さんが人生100時代を全うされる2100年には凡そ5000万人に半減します。



■ 人口世界一の東京圏は何処まで膨張するのか？

現在の東京圏（南関東1都3県）の人口は3800万人と世界一の規模を誇ります。しかし、コロナ禍で東京都の人口が2年間ほど減少に転じたけれど、最近の日経BP社のWeb配信（5/13）に「東京への一極集中が再び始まった」との情報。要するに、例え日本全国が人口減少下にあっても、東京への人口集中が更に進行するなら、地方圏の未来の人口は幾らになるのでしょうか？

参考情報ですが、「日本の人口統計」が開始された1872年（明治6年）には、初年度は1位が広島県で、2位が山口県、3位が東京府（*1）となっており、その後のトップは新潟県、石川県、愛知県、大阪府といった変遷があり、東京都がトップを維持するのは1946年以降の話なのです。

（*1）明治元年～25年間の東京府は現在の東京都区部のエリア、同26年に多摩地域を含む現在のエリアになる。

最終回では、何故にこのような前置きを述べるのか？

それは「人生 100 年時代」という時間軸で「この国のかたち」を考えるなら、人が生まれてから没する間には、予想できない地域の盛衰を体験するだろうという事実です。

さて、ここからが本番で、超・過疎地域に生れる「5つの未来」を描きます。

■ 1. 期待されるグリーンインフラ

昨今のウクライナ情勢で、この国の安全保障は武器だけではなく、食料需給（小麦などの高騰）、エネルギー資源（石油やガス）、建設資材（特に木材の不足）・・・等の脆弱性が浮き彫りになりました。

そこで、「グリーンインフラ」は、都市部ではマンションの玄関先の植樹や、ビルの屋上緑化、街路樹や公園緑化、最近では都市農地の保全も含まれるようですが、その程度の発想で「インフラ」と呼んでもらっては困ります。地方圏の中山間地や島嶼部に行くと、とんでもない「耕作放棄地」と、誰も入山しない「荒廃した山林」に心が痛みます。これは「国敗れて山河在り」ではなく、今や「山河敗れて都会だけが繁栄」という、「この国の歪（ゆがみ）」を表しています。

だって、過疎地にはヒト・モノ・カネが無いので都市部からの支援が不可欠。そこで近年は、民間企業が続々参入しています。

例えば、サントリー、アサヒなどの飲料メーカーや、広島のアンデルセン、カルビー、三島などの製パン、菓子、食材メーカー、さらにカキ養殖の漁協が、山に入って木を植えています。

しかし、「建設界の活動」が何故か低調なので、私は環境省の「自然再生事業」の法定協議会に参加し、荒廃した湿原再生事業をモデルに、建設界への参加を呼び掛けています。



■ 2. 再生エネルギーの供給基地

日本のエネルギー問題は、今や喫緊のテーマです。

本州で東京から一番遠い島根県西部（*2）から、広島と山口の3県に及び西中国山地が注目されています。

主に東京資本による風力発電の申請が多数出され、環境団体が横断幕を掲げて反対運動を展開しています。

（*2）中心地の旧匹見町は「日本の過疎発祥の地」として知られ、人口減少率△87%、高齢化率 53%という超、過疎地域。

私の風車設置への問題意識は、①風はタダで良いのか？ ②工事用搬入路の管理が出来るのか？（*3）、③現地に管理会社を設立すべきではないか？

この事業を東京の業者任せにせず、土木技術者の適切な指導のもとに、風車や道路の景観保全、維持管理を担い、災害を引き起こしてはいけません。

（*3）標高 1000m以上の山の尾根に、風車を大型トレーラーで搬入するには、大規模な工食用道路が必要ですが、技術的な難易度が高く、地元自治体では技術指導できません。そこで複数のプロジェクトを統合的に管理する体制が必要で、これは風車の設置後にも、長期にわたる継続的な維持管理が求められます。



■ 3. 未来につなぐ医療・福祉体制

まず過疎地域で、安心して暮らすには、「医療+福祉体制」の充実が不可欠です。また、これは都市部

からの移住者にも必要でしょう。ここでは、3つの先進的な取り組みを紹介します。

- ① 従来からの見守り活動に加え、旧町村への医師の派遣システムとオンライン診療の仕組み。
- ② 急性期の患者をドクターヘリで救助する体制。
具体的には、広島市北部に移転した市立・安佐市民病院は、県北から島根県西部地域をカバーする広域医療拠点として再開。**(*4)**
- ③ 医療介護施設の職員不足を外国人でカバー。
若者の少ない旧町村では、タイやベトナム人の雇用が不可欠。更なる外国人の雇用促進に向けて、新たに医療福祉専門学校を設ける動きが活発に。

これらの医療や福祉体制は、日本の未来を先取りした、「超高齢時代のモデル」となるでしょう。

(*4) 私のNPOでは、病院の移転に合わせ、高速ICに直結する道路整備を広島市議会に提案しています。



■ 4. 未来につなぐ教育体制

日経BP社刊の「ニッポンの貧困」によれば、その原因は「教育」にあると述べています。

東京圏では、「如何にして有名私立の中高に入れるか!」というゲームが繰り返されていますが、過疎地域では、日本の未来を担う、非常にユニークな学校が続々と生まれています。

一つは、有名大学に合格するための少数精鋭の教育。もう一つは、地域の問題解決/自己実現能力を獲得する教育です。後者は、我々の土木人にも求められる能力だと思います。

例えば、広島県では「自己を認識し、自分の人生を選択し、表現する力」が、今年度から高校入試制度に全国初の導入。合計100点中の20点という配分。

次に、県下有数の過疎地域の大崎上島に、中高一貫、全寮制の「広島観智学園」を設立。国内外からの受け入れ態勢で、世界の『よりよい未来』を創造できるリーダーを育成。公立校では全国初の「国際バカロレア (IB=International Baccalaureate) 認定校」に指定。



■ 5. 過疎地から始まる未来の交通革命

- ① ドローン配送は、船便の少ない離島から始まり、山間僻地でも試行中。
- ② 貨客混合バスは、地方圏のバスの赤字路線 VS 宅配事業の効率化から、県北の備北交通などで実施中。
- ③ 「グリーンスローモビリティ」は、道が狭くてバスやタクシーの入れない地域（尾道、鞆の浦、庄原、呉）で実験中。
- ④ 空飛ぶタクシーは、交通の不便な地域で有効。ANA, JAL, トヨタ、ホンダなどが実用化に向けて試作中。



これらの未来型の交通システムは、交通の不便な過疎地から始まり、今のところ何不自由のない東京圏での実現には高いハードルがあるので、最後という順番になるでしょう。

以上